

## 『権威』について考える法教材の開発

～人はなぜ自ら従おうとするのか？～

三浦 朋子（亜細亜大学）・坂本真史（神奈川県弁護士会）・  
佐藤裕（神奈川県弁護士会）・藤川武揚（茨城県弁護士会）

### 1. はじめに

本発表では「権威」について考えるための具体的な教材とその意義について考察する。とくに教材開発では、実験授業の成果や学校教員との意見交換などを踏まえて、本授業のポイント及び実際に授業を行う上での留意点、当初の教材案からの改善点などを明らかにする。

これまで法教育では、「ルールづくり」や「ルール評価」などの教材開発が多数行われてきた。そこでは、どのようなルールが必要か、出来たルールが目的達成のために妥当なものかどうかを評価するなどの内容が中心であった。そもそもなぜ私たちは自らルールに従おうとするのか。その前提には、私たちがそのルールの存在を承認する何かしらの「権威」が存在しているはずである。「みんなで決めた（同意した）から」という場合の「同意」も、権威の源泉の一つである。

### 2. 「権威について考える」ことの必要性

「権威」を正面から考えることは、一見すると、とても難しいように思われるかもしれない。例えば、私たちが何かに対して自ら進んで付き従ったり同意したりするとき、それはどのような理由によるからであろうか。「昔からの習慣だから」「ルールや法律に決められているから」「親や学校の先生に言われたから」「みんながそうしているから」「自分の信仰する宗教に定められているから」など、言い分は様々であろう。このような私たちの意識や行動原理の背景をまず探ることが、本発表でいう「権威について考える」ことなのである。

権威の担い手は、個人や役割、制度など多様である。そうした様々な場合を想定し考えてみると、自分自身がなぜそれを受け容れたのか（否か）、同様に他者はどうなのか、またそこにはどのような影響力や関係性が存在しているのかなど、普段あまり意識することが少ないけれども、じつは物事を理解する上で大切な視点に気づくことができる。権威について考えることは、様々な社会事象や問題に関わる多様なファクターを理解し、さらに問題解決の糸口を切り拓く示唆を得ることにもなるだろう。以上の理由から、これまでの法教育では十分に扱われてこなかった「権威」を取り上げて、新たな視点から教材化を試みる。

### 3. 授業の概略

今回、教材開発及び実践の検証を行った授業では、ある指図について、納得できるか、できないか（指図できる資格があるかどうか）、指図できる資格（根拠）は何に由来するか（「権威」はどこからくるのか）を考える内容となっている。無意識的に感じている「権威」を意識してみると、何がみえてくるだろうか。ルールや指図の根拠について考えることができる能力は、自ら主体的に考え、公正に判断し、行動するうえでの、いわば「基礎体力」である。この教材は、主権者教育、中学校「公民」及び高等学校「公共」において用いることができると考えられる。詳しくは、当日の配布資料等を参照されたい。